

令和4年度地域イノベーション創出に向けた実践的教育研究推進プログラム(地域連携エクステンション活動)採択一覧

No.	採択区分	部局名	代表者氏名	事業名	事業概要
1	地域連携エクステンション活動(講座型)	地域学部	住川 英明	キャンパスで「環境」を学ぼう!	<p>平成29年度よりJST事業「ジュニアドクター育成塾」に採用された教育プログラムとして実施してきた「めざせ!地球を救う環境博士」環境基礎プログラムの後継事業として実施する。</p> <p>鳥取大学及び米子工業高等専門学校のカンパスで、地域の自然を中心とする様々な「環境」に関するテーマについて、最新の科学的知見を講義・実験(実習)・議論によって学ぶ。</p>
2	地域連携エクステンション活動(講座型)	地域学部	木野彩子	プラネタリウムレクチャーパフォーマンス「踊る?宇宙の旅」	<p>令和3年11月にみなと科学館プラネタリウム室(東京都港区)で開催された「ダンスハ體育ナリ?其の三2021年踊ル?宇宙の旅」(国際ダンスフェスティバルDance New AIR2020→2021からの委託作品。制作費80万円)の鳥取版の制作と上演を目指す。</p> <p>なお、この作品は2016年から手掛けているレクチャーパフォーマンスであるが、米子特別版として米子児童文化センター及び鳥取大学医学部染色体工学研究センターの協力を仰ぎ、染色体や電子顕微鏡研究に触れる内容を目指している。宇宙のマクロコスモスと身体のミクロコスモスを対比しながら、科学技術や宇宙工学に興味を持つ子供達を増やしていく試みである。</p> <p>通常プラネタリウムの番組は40分程度なので、大幅に短縮をしなければいけないが、可能になれば、他地区の同型のプラネタリウム(みなと科学館、米子児童文化センターは同じ機種であり、他に高知、室蘭、京都などがあげられる)でも公演が可能になる。</p> <p>なお、これまでレクチャーパフォーマンスとして舞踊教育の歴史やオリンピックを含めた身体観を扱ったものがあり、それもダイジェストにして補講も制作する。</p>
3	地域連携エクステンション活動(講座型)	医学部	角南 なおみ	ウェルビーイングを高める子育てワークショップ	<p>2015年度から日南町教育委員会、日南町福祉保健課と連携し、小学校・保育園の巡回発達相談をスタートさせ、その後小学校で保護者研修会、教員研修会を継続実施してきた。</p> <p>昨年、日南町のにちなん保育園、石見保育園、山の上保育園の保護者にウェルビーイング(心理的健康)アンケートを依頼したところ、保護者のウェルビーイング数値の低さと子どもの年齢の低さが関連していることが明らかになった。そのため、育児支援および移住者支援をしている日南町において、子どもと母親が元気な家庭が地域の活性化を促進すると考え、保育園の未満時以上を持つ保護者に対し、子どもの発達理解と育児の悩み共有を行う場として、日南町教育委員会と連携し保護者のウェルビーイングを高めることを目的とした子育てワークショップを実施する。</p>

No.	採択区分	部局名	代表者氏名	事業名	事業概要
4	地域連携エクステンション活動(講座型)	工学部	木村 周平	電気・情報に関する体験講座の実施 (プログラミング体験教室 スマホアプリを作ろうの会)	若者の科学(工学)離れが言われているが、子供のなりたい職業に関するアンケートでは「学者・博士」が上位にある等、幼少時の科学に対する憧れは強い。 その為、幼少期から継続的に科学に触れる機会を提供する事で、科学を身近なものとして認識して貰う事を目的とする。また、実施者らは主に小中高生を対象にした情報に関するプログラミング体験講座として平成22年より同教室を実施してきている(これまでに延べ600名以上の小中高生が参加している)。
5	地域連携エクステンション活動(講座型)	農学部	菅森 義晃	山陰海岸ジオパークを通じた地質学のアウトリーチ	2017年度から菅森は山陰海岸ジオパークの地質に関して鳥取県との共同研究を実施している。研究成果を地元住民に還元するとともにガイド団体等によるツーリズム活動への研究成果の利用を促すことが本事業の目的である。2021年度は2020年度の鳥取県との共同研究の成果を中心にこれまでの研究成果の一部を紹介する。 成果を紹介するにあたって、通常の学会発表のような発表形態では一般の人にも何も届かない。そのため、研究成果が効果的に伝わるように、様々な属性の参加者がテーブルを囲んで研究発表を聞き、感想を語り合う場を設定したイベントを2018年度から「山陰海岸ジオパーク みんなでおしゃべり」を実施している。このイベントは大学教員やジオパークの研究者の発表と学生の実習における成果発表、ゲスト講師の講演を実施し、それらを受けて、聴衆が能動的な質疑と感想を共有し、聴衆がイベントの目標(主催者が設定)に向かってファシリテーター(大岩根尚博士)が舵取りをするという形態で実施され、山陰海岸ジオパークにおける鳥取大学の名物イベントになりつつあり、継続的な実施が参加者から強く望まれている。 また、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から「みんなでおしゃべり3」をオンラインで実施したために、当初予定していた実物(偏光顕微鏡で岩石を見てもらう)を用いたアウトリーチができなかった。そのため、鳥取県立山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館の協力の下、「顕微鏡で見る石の世界」を2021年3月13日に実施予定である。 2021年度も「みんなでおしゃべり4」を実施し、鳥取大学の研究成果の効果的な住民への還元を図っていきたい。また、このイベントがオンラインでの開催になった場合は、2021度に引き続いて「顕微鏡で見る石の世界2」を実施し、岩石の顕微鏡下での美しき世界から地球の成り立ちを一般の方々を知ってもらい、鳥取大学の地質学分野の研究や「地球の営み」の理解につなげていきたい。

No.	採択区分	部局名	代表者氏名	事業名	事業概要
6	地域連携エクステンション活動(講座型)	教育支援・国際交流推進機構	御館 久里恵	国際理解教室「世界を知ろう」	<p>本事業は、本学の外国人留学生在が鳥取県内(及び隣接県)の学校に出向き、実際の交流や体験を通してそれぞれの文化を伝え、児童・生徒の国際感覚を養うことを目的として実施するものである。</p> <p>派遣留学生から各自の文化等を、プレゼンテーション、クイズ、読み聞かせ、ことばの教室、伝統的な遊び等を通して子どもたちに伝える。子どもたちからも自らの持つ文化的資源や学習成果等を留学生たちに披露する。全体をワークショップ形式で実施する場合は、国際交流センター公認の学生団体「G-frenz」のメンバーがファシリテーションを行う。</p> <p>本事業は平成24年度から継続し、訪問学校の地域・学校種を増やしてきたものであり、各学校からの期待も高まっている。令和4年度は本事業についてより広く周知し、訪問学校を増やしていく。</p>
7	地域連携エクステンション活動(実践型)	地域学部	鈴木 慎一郎	自然環境を題材とした「子どもの音楽イベント」の企画と実践	<p>日本には四季があるにもかかわらず、生活環境の現代化に伴い、自然を感じにくくなっている。また、様々な電子機器の普及に伴い、生の音楽に触れる機会が減っている。幼児期・児童期の体験は、豊かな感性を育成する上でも重要である。</p> <p>本事業の目的は、幼児・児童を対象とする自然環境を題材とした唱歌、童謡を取り上げた「子どもの音楽イベント」の企画と実践を学生参画により実施し、その有効性を検証し、実態を明らかにすることである。</p> <p>令和3(2021)年度は「日本の四季」をテーマとし、唱歌を通して自然環境への関心も高まった。令和4(2022)年度では、「花」をテーマとし、「花」を題材とした唱歌、童謡を取り上げていきたい。</p>
8	地域連携エクステンション活動(実践型)	工学部	小野 勇一	小学生を対象とした「鳥大ものづくり教室」の開催	<p>本事業は小学生とその保護者を対象とする親子参加型の実践的なものづくり教室で、これまでに25回以上の開催実績があります。参加者は工学部ものづくり教育実践センター(ICEE)の設備やノウハウを活用し、日常では体験できない本格的なものづくりを体験することができます。</p> <p>また、今回も去年に引き続き、コロナ禍への対応も兼ねて、オンラインでのものづくり体験を可能にする教材開発と試行実践にも取り組みます。</p>

No.	採択区分	部局名	代表者氏名	事業名	事業概要
9	地域連携エクステンション活動(実践型)	工学部	塩崎 一郎	今日から学ぶ高校地学2022	<p>【経緯・背景】 本事業は鳥取大学全学共通科目・教養科目・基幹科目「地学及び地学実験演習」を教科集団地学の一員として職責を果たす中で企画・草稿された。</p> <p>近年、大規模気候変動や自然災害の発生による「地学」が扱う現象への国民の関心は高まっているが、数%未満という高校における地学履修率の現実がある。これらを背景として、「科学リテラシーの向上」、「理系離れ」時代に対するひとつの試みとして、また、鳥取県が進めるジオパーク普及・啓蒙活動(山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館(以降SKGMと略))ならびに鳥取市さじアストロパーク(以降TSAPと略)の施設外連携等との連携に関する提案として本事業を企画した。</p> <p>【目的】 本事業では、本学湖山キャンパスと山陰海岸ジオパーク海と大地の自然館(SKGM)において、観察会や講演会、学習会を通して、自然現象を「その背景となる法則を含め」提供することを目的とする。教育・研究成果の地域社会に還元と地域住民の生涯学習や特に、今年度の発展的課題として防災・減災意識向上の機会を提供するために、天文ならびに固体地球の分野別テーマを選び、野外観察会や学習会を中心とした事業を行う。</p>
10	地域連携エクステンション活動(実践型)	農学部	遠藤 直樹	第10回鳥取大学菌類きのこ観察講座 ～野外観察と顕微鏡実習～	<p>本事業は、農学部附属菌類きのこ遺伝資源研究センター(以下、センター)が主催して2012年度から継続して毎年度行っている事業であり、2013年度から森林公園とつとり出合いの森(鳥取市;以下、出合いの森)と共催している。本事業は菌類きのこ遺伝資源研究センターに所属するきのこのエキスパートが一般市民に対して、きのこの探し方や見分け方、生態系での役割を学術的視点から易しくレクチャーし、本事業を通じて鳥取大学が取り組む菌学教育および研究の一端について発信することを目的としている。本事業には本学農学部、持続性社会創生科学研究科、および連合農学研究科の学生もスタッフ(アシスタント)として参加し、一般市民の交流を通じて人間力を養成する。なお、本事業の実施に際しては、参加者およびスタッフはマスク着用とし、受付時の手指のアルコール消毒や検温、顕微鏡実習時のスタッフのフェイスシールド着用、イベントを通してのソーシャルディスタンス確保、ならびに参加者の連絡先の把握を徹底し、新型コロナウイルス感染防止に努める。また、参加者の連絡先情報については流出防止に努め、イベント終了1ヶ月を経過した時点で適切な手法により廃棄する。</p>

No.	採択区分	部局名	代表者氏名	事業名	事業概要
11	地域連携エクステンション活動(実践型)	農学部	山口 武視	第16回 FSCあぐりスクール	FSCあぐりスクールは児童とその保護者が一緒になり、作物を育て、自分たちで世話をした農作物を食べることで食について知る機会の提供を目的としています。 野菜や米の栽培管理だけでなくモチや蕎麦などの加工にも挑戦します。参加者への指導助言は農学部FSCの教員及び技術職員が行います。また参加者の皆さんにはそれぞれ可能な範囲で草取りや野菜収穫など日頃の管理をお願いし日々の生育の様子を観察して頂きます。
12	地域連携エクステンション活動(実践型)	農学部	辻 渉	トウモロコシを通じた「親と子」の食育プログラム	食と農の大切さを理解する食育の場を提供することを目的として、親子でトウモロコシの栽培管理を学び、収穫作業を体験し調査を行う。 直にトウモロコシに触れることで楽しみながら深い学びにつながるように活動を実施する。
13	地域連携エクステンション活動(実践型)	乾燥地研究センター	黒崎 泰典	乾燥地研究センター一般公開	本事業は、地域住民の方々を対象に、乾燥地の自然や文化および乾燥地が関係する諸問題を紹介し、乾燥地研究の重要性を理解してもらうことを目的としている。 また、乾燥地研究センターの研究・活動内容の紹介及び研究施設等の見学を行い、乾燥地研究センターについてより深く一般の方々に理解していただくことを目指している。
14	地域連携エクステンション活動(実践型)	技術部	三谷 秀明	米子市教育研究会および日南町と連携した科学実験教室の開講	米子市小学校教育研究会理科部(以下、理科部と略)と日南町の連携事業は、それぞれ技術部が企画・運営を行い別々に実施する。いずれの事業も参加者に対して理科実験を思いっきり楽しんでもらい、理科に親しみを持ってもらうことを目的とする。 理科部との連携事業は、米子市内小学校5、6年生を対象として、夏休み期間中に複数の講座を1日に限定し、米子市内小学校と本学が開催する。本学は、医学に関する1テーマに絞り、医学部を会場に午前と午後各50名に限定して実験教室を開講する。過去2回とも100名を超える応募がある人気講座であるが、令和2、3年度はコロナ感染対策によりすべての講座が中止となったことから、令和4年度は通常開催を予定する。 日南町連携事業は平成19年度より開催しているイベントである。例年10月末のにちなみふる里まつりに併せ、日曜日の1日に限定し、来場者随時指導という形式で医学部、農学部、研究推進機構、医学部を退職した教員、技術部職員が講師となり開講する。来場者数は、例年70～80名程度、開講数は平均8講座である。令和3年度は規模を縮小し開講したが、令和4年度は例年通りの開催を予定する。

No.	採択区分	部局名	代表者氏名	事業名	事業概要
15	地域連携エクステンション活動(実践型)	技術部	安藤 敬子	鳥取大学発「出前おもしろ実験室」プロジェクト～理科好きな子どもたちを育てるために～	<p>「出前おもしろ実験室」は、子どもたちに理科・科学への興味・関心を深めてもらうことを目的として行う出張形式の体験型科学実験教室である。平成18年度から毎年実施しており、口コミによる依頼やリピーターが多いことから効果や期待、満足度が高いことが窺える。</p> <p>また、年々学校の授業や教員研修、公共施設など教育現場からの依頼が増えており、教育効果への期待感も感じられる。令和3年度は本事業の活動の一部がオンライン開催となったが、今後も社会状況を鑑みたオンライン出前実験、オンデマンド教材開発を通じ、本事業の充実を図る。</p>
16	地域連携エクステンション活動(実践型)	技術部	山田 有里子	電子工作教室	<p>技術部では、小中学生を対象に工学の技術を体験する機会を提供することによって、子どもたちのものづくりや科学技術に対する興味・関心を高めること、加えて技術職員のもつ技術力を学内外に広く伝えることを目的として、平成20年度から様々な工作教室・技術教室を実施してきた。</p> <p>令和2年度、3年度は社会状況を鑑み、対面からオンラインに形式を変更し教室を開催した。オンライン開催で見えてきた課題は、安全・確実に工作体験が可能となる教材と、自由度の高い教材との両立が難しいことであった。令和4年度は手探りであった過去2回のオンライン開催の経験を活かし、自由度の高い教材開発に努める。</p>